論文

教員養成課程における「感覚をつなぐ表現活動」の試みⅡ
―「保育内容演習（表現）」での音楽と造形を統合させた実践から―

岡　林　典　子　　矢　野　　真
（児童学科教授）　　（児童学科教授）

本稿は「感覚をつなぐ表現活動」として「保育内容演習（表現）」の授業における造形・音楽を統合させた作品づくりと発表の実践を取り上げ考察した。その結果、学生たちは感触や匂い、オノマトペなどを手がかりに五感をつなぎ、色・形・音・身体を通して多様な表現を試みていることが明らかになった。「描画と音を用いた表現」「音と映像を用いた表現」「音と動きを用いた表現」など多様な作品が発表された。

キーワード：教員養成課程、保育内容，領域「表現」，造形と音楽の統合，表現活動，コロナ禍

1．はじめに

教員養成においては、近年、学生の幅広い表現力の向上をねらいとして、音楽表現や造形表現、身体表現を結び付けた総合的な表現活動が試みられるようになっている（智原・下口 2013/古市・矢内ら 2015,2016,2017/麓・水谷 2015）。学生を対象にするだけでなく、小学生や幼・小・中の教員を対象とした表現教育の研究（初田・井上 2013）や、5 歳児を対象とした研究（奥 2016）もみられる。また、髙橋（2017）は、保育者を対象に、造形と音楽を結び付けた表現活動について、「①想像力・感性・創造性」「②自由な発想」「③活動の楽しさ」「④個性」の 4 つの観点から質問紙調査を行った結果、9 割以上の保育者が、子どもへの影響について肯定的な意見を持っていることを明らかにしている。

音楽教育と造形教育を専門とする筆者らも約 15 年前から、学生が自身の感性を豊かに育み、指導者として高い資質と能力、表現力を身につけることを目的に、音楽・造形・身体の結びつきを重視した表現教育のプログラム開発を行ってきた（山野・岡林・ガハプカ 2010/岡林・ガハプカ・山野 2012/岡林・山野 2020,2021）。また、共に表現教育のテキストも作成してきた（山野・岡林ほか 2013, 2018）。さらに 2021 年度からは、共に「保育内容演習（表現）」の授業を担当しており、時間をかけて授業内容を話し合い、五感をつなぎ、音・形・色・動きを関連づける授業を計画し、実践している。この授業では、演習形式による表現活動（造形・音楽・身体）の体験学習や、情報機器の活用を含む教材研究も進めている。

昨年度は「保育内容演習（表現）」全 15 回の授業から、第 11 回の授業「匂い・手触りを形・色・音にする―触覚・嗅覚を視覚・聴覚につなげる表現活動」を取り上げ、授業内容について詳細な検討を行った。その結果、学生たちは触覚や嗅覚から感受したイメージを的確なオノマトペで表し、それらを手掛かりに色や形、音へと感覚をつなげて表現を広げていることが明らかになった。また、匂いや手触りから感じるイメージが音楽表現の基礎的要素となりえることに、学生の気づきが得られた。（岡林・矢野 2022）

それに続く本稿は、昨年度の「保育内容演習（表現）」の第 12 回～15 回の授業における学生の様子や、オンラインによる提出作品、振り返りシートなどから、五感をどのようにつないで表現がなされるのか、活動から得られる気づきは何か、オンライン提出には如何なる効果があるのかなどについて考察することを目指す。

２.「保育内容演習（表現）」の授業概要

本学児童学科の４年間における表現関係の科目を表１に挙げる。「保育内容演習（表現）」（表１の◆印）は、必修科目として２年次の４セメスターに位置づけられている。

表１　本学児童学科の表現関係科目の一覧

セメスター	授業科目
1	「児童表現学」（必修）
2	「幼児と表現」（必修）
3	「児童音楽Ⅰ」（必修） 「児童図工Ⅰ」（必修）
4	**◆「保育内容演習（表現）」（必修）**
5	「児童図工Ⅱ」（選択） 「音楽あそび」（選択）
6	「児童音楽Ⅱ」（選択）
7	「音楽応用演習Ⅰ」（選択） 「おもちゃ研究」（選択）
8	「音楽応用演習Ⅱ」（選択）

次に2021年度の全15回の授業内容を表**2**に示す。★のついた回が本稿の分析対象である。授業は４クラスを矢野と岡林が共に担当しているため、（第２回と第３回）、（第４回と第５回）、（第６回と第７回）、（第８回と第９回）、（第10回と第11回）は、同じ内容で４つのクラスを隔週交代にして進めた。第12回までに学生はキャンパスの音聴き歩き体験し、さらに各自の日常の音日記をまとめることも経験しており、身の回りの音環境を捉えることを学んできている。

また、クレヨン・パスを使った表現方法・技術としては混色・ぼかし・スクラッチなどを学び、絵の具を使った表現方法・技術としてはデカルコマニー・ドリッピングなどについもて学んでいる。

表２「保育内容演習（表現）」の授業内容

第１回	領域「表現」のねらい/五感を使った活動について（矢野・岡林）
第２回	色をみる―「実物投影機を使って生活の中の色と空間構成を考える（矢野）
第３回	声と体のつながりを感じる―オノマトペを用いて（岡林）
第４回	手で触れる―粘土による触覚を通した造形遊び（矢野）
第５回	環境を聴く―キャンパスの音聴き歩きと音日記（岡林）
第６回	クレヨン・パスを使った表現方法・技術―混色・ぼかし・スクラッチ（矢野）
第７回	音環境を感じる教材と指導法―絵本を用いた保育実践（ＤＶＤ）の視聴を通して―（岡林）
第８回	絵の具を使った表現方法・技術―デカルコマニー・ドリッピングなど（矢野）
第９回	音を描く―民族楽器の音色と形・色の関わり（岡林）
第10回	匂いを感じる―木の香りによる保育実践（DVD）鑑賞と嗅覚による教材と指導法（矢野）
第11回	匂い・手触りを形・色・音にする―触覚・嗅覚を視覚・聴覚につなげる表現方法（岡林）
第12回 ★	感性を育む表現活動（1） 音楽・造形・身体表現を統合した教材研究（矢野・岡林）
第13回 ★	感性を育む表現活動（２） 音楽・造形・身体表現を統合した表現方法の研究（矢野・岡林）
第14回 ★	感性を育む表現活動（３） 音楽・造形・身体表現を統合した作品づくり（矢野・岡林）
第15回 ★	感性を育む表現活動（４） 音楽・造形・身体表現を統合した作品の発表（矢野・岡林）

3．第 12～15 回の授業内容

前章では全 15 回の授業内容を示したが、本章では「感覚をつなぐ表現活動」として試みた第 12~15 回の授業内容「音楽・造形・身体表現を統合した作品づくり」について述べる。

【授業の進行手順】

(1)はじめに教員は学生に対し、グループでキャンパスに出かけ、ある場所を決めて、そこの音や匂い、色・形、感触などを「身体で」「音で」「色・形で」表してみることを説明した。また、図形楽譜をいくつか紹介し、描画をもとに音や音楽表現がなされていることを伝えた。

学生は、表現のプロセス過程で上記の 3 つの方法を全て表現してみて、その中から自分たちのグループに相応しい方法を探る。オノマトペで表したり、身体を使ったり音具を作成して音楽的な表現をしたり、身体表現を試みてもよい。

(2)第 12 回では、決められた範囲のキャンパス内をグループで散策し、適当な場所を決め、どのような表現を試みるかを話し合い、その内容をワークシートにまとめて提出した。

(3)第 13 回では、前回の授業で決定したキャンパス内の場所における表現活動について、具体的な方法と内容を検討し作品づくりを行った。

(4)第 14 回では、前回に続き作品づくりを行い、最終発表に向けての準備を行った。作品づくりの過程で相談した工夫点については、ワークシートにまとめて提出した。コロナ禍であることも考慮し、第 15 回の最終発表は対面では行わず、各グループが発表動画を作成し、オンラインに提出した。

(5)第 15 回では、「各グループから提出された発表動画を視聴して感じたことや気づいたこと」「第 12 回からの一連の表現活動を通して感じたことや気づいたこと」を各自でワークシートにまとめて提出した。

4．学生の表現について

決められた範囲ではあったが、学生たちはキャンパス内をグループで散策し、作品にする場所を決め、五感を通して多様な作品づくりを行っていた。いくつかの事例を以下に示す。

（1）「描画と音を用いた表現」

このグループは「絵と音」を用いて「外から見た E 校舎の学食」の雰囲気を表わす作品づくりを行っている。授業が後期（12 月 16 日）5 限の時間帯であったので、キャンパスの散策時は外は薄暗くなっていた。そうした環境の中で学生たちは E 校舎の学食に灯ったライトの明るさや、周りの空気の冷たさ、夕方の薄暗さなどを五感を通して感じ取り、描画に表した（図 1～3 参照）。

図 1　学生が選んだ場所「E 校舎の学食」

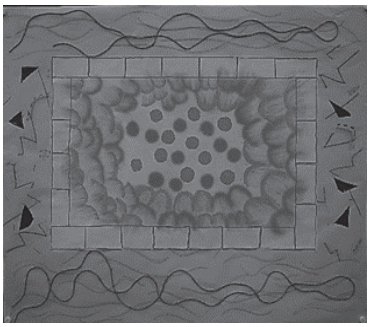

図 2「外から見た E 校舎の学食」の描画

図 3 描画をもとに音で表現する学生たち

描画表現（図２）の工夫については、「建物の中のライトが暖かく、キラキラ、ピカピカ、ホワホワしている様子をオレンジ色や黄色を使い、広がるようにして描いた。」「それを囲んでいるレンガの建物は、カラーペンの質感を利用して重厚さを表現した。」「空のどんよりした感じを出すためにグレーのパスを使い表現した。」「冷たい空気の凛とした様子も青色でカクカクと硬いイメージの線で表現した。」などと述べている。音については、「建物は硬く強い響きになるようにした。」「ライトが建物の中にあるので、鈴を鳴らしながら箱から出し入れして、変化をつけた。」などの工夫が述べられた。

学生の動画作品からは、鈴の音がキラキラしたライトの質感を表すように効果的に用いられているのが捉えられた。また、缶を打ち合わせる硬い質感の音や、ラップの芯を掌で打つ音などによって、建物の硬いイメージを表そうと工夫していることが感じ取れた。

表３にこのグループの学生の感想をまとめた。

表３　描画と音を用いて表現した学生の感想

①みんなで一つの作品を仕上げることや、グループで表現することがすごく楽しく感じられた。
②校舎内のランプや建物の雰囲気をどのように表すか、そして全体をどのように組み合わせるかなどに特に苦労した。
③4 人が思い描いているイメージを擦り合わせることで世界観が広がり、より豊かなイメージを作品に詰め込むことができたと思う。
④既成の楽器ではイメージしている音を見つけ出すことが難しかった。
⑤「美しい」と感じたことは共通していたが、それを形にする表現法には個々人の感性が表われており、一人ひとりの意見を反映させるのが難しかった。
⑥)動画で聞き直してみると、E 校舎の食堂の明かりや、その周りの夕方の外の曇りや暗さなどがきちんと楽器で表されていると思った。

表３からは、グループで一つの作品を仕上げて表現することの楽しさや、一人ひとりの感性の違いを一つの作品に反映させることの難しさなどが述べられている[表３:①~⑤]。また、自分たちの提出動画を客観的に聞き直して確認した内容も述べられている[表３：⑥]。

（２）「音と映像を用いた表現」

このグループは、図工棟周辺のコンクリートや砂利、落ち葉などの異なる地面の上を歩く足音を、民族楽器や音具を用いて表現している。工夫点については、「女子大生が歩く足音を、赤い靴と民族楽器や身近にあるものを用いて表現した。歩く場所による足音の違いが工夫した点である。」と述べている。先のグループのように、図形楽譜となるような描画活動は行っておらず、女子大生の足の動きや音を分かりやすく表現するために、赤い靴を履いた足が印象的に現れる。

図４ 学生が選んだ場所「図工棟の周辺」

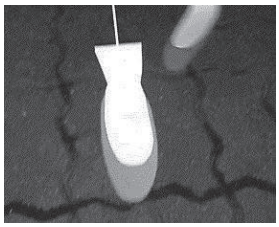

図５ コンクリート上を歩く

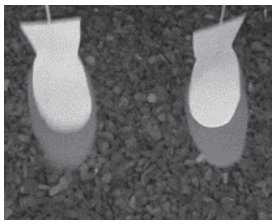

図６ 砂利の地面を歩く

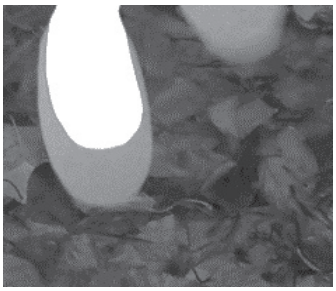

図７ 落ち葉を踏みしめて歩く

作成された動画は、場所によって異なる足音が様々な音でリアルに、また楽しく軽快に表現されたユニークな作品である（図４～7 参照）。制作過程でグループが記述した３枚のワークシートからは、「夕方のもの悲しさ」や「足音の面白さ」を表そうとする工夫が確認できる。

出発点である図工棟 2 階の教室から「階段」を通って「図工棟のドアを開けて」外に出る→→砂利の上を歩く→側溝の上を通る→コンクリートの上を歩く→落ち葉の上を歩くなどの歩行過程での足音は、カバサ（砂利の上を歩く音）やチャフチャス（ドアを開ける音）、缶や瓶のふたを用いた音（側溝の上を通る音）など、画面の移動と音の変化が様々な楽器や音具で表現されており、楽しく視聴できる作品となっている。表４に、このグループの学生の感想をまとめた。

表４　音と動画で表現した学生の感想

①身近に溢れる音の面白さについて知ることができた。
②足音は、歩行者の特徴や靴の素材、床や地面の素材などにより変化し、変わりゆく点が素敵だと感じた。
③より本物に近い音探しのために、周りにあるものを鳴らしたり、振ったり、軽くぶつけたりして身近にあるものの多様な表現に触れていった。その過程で見つけた様々な音の響きが面白く、そして美しく、表現の多様性を実感した。
④音は自分たちで作り出せるのだという感動を覚えた。
⑤どの音がイメージに近いかを試行錯誤していたところ、楽器だけでなくカゴや缶など身の周りのものでも多くの種類の音が鳴ることを発見した。
⑥次は、音を造形で表現したり、色で表現したりすることに挑戦してみたい。
⑦様々な足音をどのような音で表現すると、聞き手に想像してもらえるかなどを考えながら楽器を選ぶことが難しく感じられた。

表４からは、足音の響きの面白さや、素材により音が変化することの面白さを感じていることが見て取れる[表４:①,②]。また、振ったり軽くぶつけたりして、音を作り出すことの楽しさや面白さを実感していることも捉えられる[表４:③,④]。新たな表現への挑戦意欲も述べられている[表４:⑤]。

一方、相応しい音を表現するための楽器を選ぶことの難しさも挙げられている[表 4:⑥]。既成の楽器を用いるだけでなく、自分たちで身の回りのものを使って音を作り出すことも音への興味・関心を引き出す上では大事なことといえるだろう。

（３）「音と動きを用いた表現」

このグループは、C 校舎のコンビニエンスストア横の鏡のように姿が映る壁のある場所を選んだ。この場所は立つ位置によって映る姿が細くなったり太くなったり、ゆがんだりする。その不思議さを表現しようとこの場所を選んだと述べている。

図８「コンビニエンスストア横の物が歪んで映る壁

図９　音に合わせて身体表現をする学生たち

学生たちは鏡の世界の不思議さや、現実と鏡の世界の境界を表現するために、ごみ袋に穴を開け、カラーテープを規則性なく貼り付けた衣装を作成し、シンギングボウル(スティックを用いて縁をこすると柔らかく心地の良い音が響く楽器：図 10）の音を背景にして身体表現を行っていた。

図 10 シンギングボウル

動画とワークシートからは、衣装制作の工夫に加えて、楽器の音と身体表現を関連づけようとする工夫がみられた。緩やかに響きを広げるシンギングボウルの音には、「身体を自由にくねくね動かし、不思議な空間を表現する」という記述が見られた。

また、ビブラスラップ（図 11）という上部の玉を手で打って鳴らす楽器を音の流れの中にアクセントとして取り入れ、その響きを「ボワーン」「カ～～ッ」というオノマトペで表している。そして、楽器の音の響きに、「体をぶるぶると振るわせて、見た目を変化させる」という工夫を試みていた。さらに「背伸びをして細くなった体を狭いところに挟まるみたいに表現する」という動きには、マジックインキで「キュッ」という音を出して合わせる工夫もみられ、ユニークで楽しい表現となっていた。

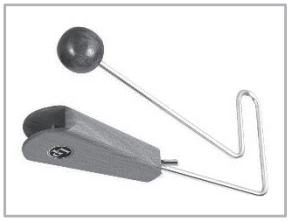

図 11 ビブラスラップ

表５に、このグループの学生の感想をまとめた。表５からは、学生たちが「鏡の世界」という興味深いテーマを見つけ、楽しんで表現に取り組んでいたことが読み取れる[表 5:①②]。作成した学生たちが感じた楽しさは、動画を通して観る者にも楽しそうな雰囲気が伝わってくる。

一方、表現を試みる過程で感じた難しさも記述されている[表 5:⑤⑥]。それぞれが真摯に表現と向き合い、感覚をつないで広げる作品づくりの難しさをグループで力を合わせて乗り越えていったことが理解できる。

表 5　音と動きで表現した学生の感想

①音とリンクする動きを考えるのがとても楽しかった。
②目や耳や手で感じてそれを音や体、造形で表現するのは楽しいと思った。グループで一つの作品を作ることで、「友達の音の捉え方や、表現の仕方に発見があった。達成感が感じられる活動であった。
③不思議な世界を不規則なリズムや大きさ、体の動きで表現した。実際に表現してみて、不規則だからこそ不思議な世界観を伝えることができたのではないかと思う。
⑤「鏡の中の不思議な空間」をテーマとして表現を考えたが、目や耳を通して感じたことを別の感覚を用いて表現する作業は簡単ではなかった。
⑥鏡をどうやって表そうかと考えた時に、衣装を作るという案が出てきた。しかし、実際に作ってみると、イメージと違うということも起こり、表現する難しさを感じた。

（４）「立体的な造形物と音と用いた表現」

先に挙げた「描画と音を用いた表現」「音と映像を用いた表現」「音と動きを用いた表現」以外に、立体的な造形物を含む描画と音を合わせた作品もみられた。図 12 は、音楽棟前の水の流れを表そうとした作品である。描画にストローを切って貼り付けたり、麻ひもや綿をつけて立体的な表現を工夫したり、クレパスを使った後に全体にスパッタリングの技法を用いて、水を表す工夫も試みている。

図 13 は E 校舎前の坂で感じた音のイメージを表現した作品である。ワークシートと動画からは、散策中に聞こえてきたヘリコプターの音をモールでくるくると立体的な形を作って表現したり、靴音のコツコツを形や色で表現するなど、平面と立体の対比を用いて工夫している。

図 12　音楽棟前の水の流れを音で表現をする学生

図 13　E 校舎の坂を立体的な描画で表現する学生

5．総合的考察

学生たちは今回の表現活動において、どのように感覚をつなぎ表現を試みていたのだろうか。そして、活動からはどのような気づきが得られただろうか。また、コロナ禍のために発表を対面ではなく動画を作成しオンライン提出にしたことには、効果があっただろうか。これらの点について、授業過程で提出されたワークシートと授業後の振り返りシートの内容をもとに考察を進める。

（1）どのように感覚をつなぎ、表現したのか

B 校舎 1 階を作品づくりの場として選んだグループを一例に挙げると、ワークシートには「B 校舎 1 階では薬品や病院の匂いを感じた。そこから金属類の音やガラスがぶつかるような『カンカン』『キンキン』という冷たく鋭い音や、素早く歩く『コツコツ』という音を連想した。色は白・青・緑・水色などの寒色を感じ、形では鋭い三角を連想したので、幾何学模様のイメージに発展させた」と述べられていた。下線部の記述に注目すると、学生たちが「匂い」→「音」「速さ」→「色」「形」へと、嗅覚から感じた感覚を聴覚、視覚へと繋げて描画表現へと発展させたことが読み取れる。また、オノマトペの「カンカン」「キンキン」「コツコツ」に共通に含まれる子音「k」は、「硬い表面・動作の厳しさ」を感じる音象徴(浜野 2014)の特徴がみられ、このグループが寒色の鋭角三角形を多数組み合わせた幾何学模様で鋭さや厳しさをイメージさせる作品表現したことが理解できる。

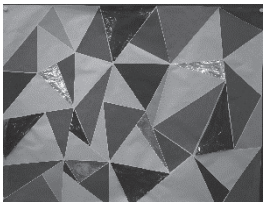

図 14　B 校舎 1 階を表現した作品

また、「歩いた地面の素材をオノマトペで表し、その音から感じるイメージにどのような音が相応しいかと試行錯誤をした。」という学生の記述からは、「踏みしめた感触」→「オノマトペ」→「音」という流れで表現しようとする姿が窺える。ここには、視覚と触覚と聴覚をつないで表現に至る過程が見て取れる。

さらに「日吉寮の古い外装や、現在は使われていないのに明かりがついている不気味な雰囲気を伝えたいと考えた。明るいイメージの寮だけでなく、使われなくなった夜の寮の暗くて怖いイメージを表現するために、クレヨンで画用紙を黒く塗りつぶした」という記述には、不気味な雰囲気を捉える感性と感覚を視覚へとつないで表現しようとする過程が捉えられる。

また、「寒かったことを風の音で表現するために、水色のすずらんテープを貼り付け、揺らして音が出るように工夫したり、冷たい感じを出すために小さな高い音を使った。」という記述には、寒さを感じる触覚に、色や音を感じる視覚と聴覚が合わさって作品表現へとつながった過程を理解することができる。

このように、学生たちは目に見えない感触や匂い、オノマトペなどを手がかりに工夫をこらして色・形・音・身体で豊かな作品づくりを行い、表現活動を試みていた。

（２）活動からどのような気づきが得られたか

「同じ班の人とのイメージの共有がとても楽しいことだと気づいた。」「活動を通して、今まで自分が気づいていなかった音や匂い、雰囲気に気づくことができた。他の人と話すことで自分にはない意見を知ることができた。」など、グループ活動を通した気づきが得られていた。

また、「他の班の表現や作品を観て、多様な表現の仕方があることに気づいた。」「その場に行かなくても、場の雰囲気やイメージがうまく表現されていると思った。その場にどのような音が鳴っていたのかを想像することもできた。その日の天気や時間の様子も分かり、興味深かった。」など、他のグループの発表を通しての気づきが得られたことが窺える。さらに、「五感を使って楽しむ活動は子どもも楽しめるだろうし、それぞれの意見を尊重できるので、面白いと感じた。」など、保育活動につながる気づきを得ていることも明らかになった。

（３）学生は活動を通して何を感じていたか

学生の記述には、「聞こえ方・感じ方・表現の仕方など、人によって違うものを一つの作品にすることは非常に難しいが、自分はどのように感じたか、どのように表現したいかなどの意見を出し合うことで作品がまとまっていくことに喜びと楽しさを覚えた。」「ひとりで作り上げる以上の達成感を味わうことができたと感じた。」など肯定的な感想が多く見られたが、一方で「私が良いと感じたものが他の人のイメージとは異なっていたり、逆も然りで、グループで意見を統一しながら作品を作ることの難しさを実感した。」という感想もみられた。授業を通して学生が感じた内容を丁寧に読み取り、今後の授業計画に活かしていくことが必要である。

（４）オンラインによる動画提出の効果

当初は作品の発表を対面で行う予定であったが、コロナ禍のために動画を作成しオンラインで提出することにした。対面ではないので、生の音や動きによる表現に触れることができないというマイナス面はあるが、学生たちは自分が所属するクラス以外の発表も視聴でき、多様な表現に触れる機会を得ることができるというプラス面も確認できた。

また、「発表を撮り終えた後は、自分たちの伝えたいことをきちんと伝えることができたという達成感が大きかった。」という学生の記述からは、発表に際して、何度も撮り直しができる動画作成は焦らずに自分たちの表現したいことを伝えることができる方法でもある。また、何度も視聴し、自分たちの演奏を客観的に捉えることができるのもメリットであるといえる。

教員による評価においても、作品を繰り返して視聴することができ、細かい表現についても見落とすことなく、落ち着いて丁寧に評価できることがプラス面であるといえよう。さらに、作品が残るので今後の授業の参考資料として活かすこともできる。

６．まとめと今後の課題

この度の活動は、筆者らにとっても初めての試みであり見通せないこともあったが、学生たちの感想などからは、表現することの楽しさや面白さを感じられたことが窺えた。今回の活動が保育者を目指す学生たちの感性を広げることの一助になればよいと思う。

コロナ禍ということもあり、表現活動には制限を余儀なくされることもあった。オンラインでの動画提出については、和田ら(2021)が指摘るように課題や限界もあるが、さらに充実した表現活動を工夫し、今後の授業内容を考えていきたい。

引用文献

岡林典子・ガハプカ奈美・山野てるひ(2012)「感性を育む表現教育のプログラム開発『楽曲を描く』課題を中心に－」『京都女子大学発達教育学部紀要』第８号, 139-148

岡林典子、山野てるひ（2020)「教員養成課程における音･形･色を関連付ける表現プログラムの研究―日本語と和楽器を用いて―」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第２号, 1-14

岡林典子、山野てるひ（2021）「教員養成課程における音・形・色を関連付ける表現プログラムの研究Ⅱ―音（音環境）とオノマトペに関する授業内容から―」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第 3 号, 1-15

岡林典子・矢野 真(2022)「教員養成課程における『感覚をつなぐ表現活動』の試み－本学児童学科の『保育内容演習（表現）』の授業内容から－」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第 4 号, 1-8

奥美佐子(2016)「子どもの音の描画表現と読み取りの研究」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要 人間科学部編』第 5 巻, 55-60

高橋 慧(2017)「造形と音楽を結び付けた子どもの表現活動に関する保育者の実践案と量的分析に基づく現状把握」『美術教育学』第 38 号, 283-295

高橋 慧(2017)「造形と音楽を結び付けた表現活動が子どもに与える影響に関する保育者の現状認識と課題」『美術教育学研究』第 49 号, 201-208

智原江美・下口美帆(2013)「クロスカリキュラムによる領域「表現」の総合的実践力習得のための試み」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第 51 号, 85-97

智原江美ほか(2016)「アンケート調査からみた保育者養成校における総合的な表現活動に関する授業の実施状況」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第 54 号, 197-208

初田隆・井上朋子(2013) 「音をかく活動の研究」『美術教育学』第 34 号, 407-418

浜野祥子（2014)『日本語のオノマトペ―音象徴と構造』くろしお出版

麓洋介・水谷誠孝(2015)「『描画的な音楽表現』による教育プログラム－サウンド・アートの視点から音楽を創作する試み」『愛知教育大学 幼児教育研究』第 18 号, 99-106

古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬(2015)「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的要素を使った教授法Ⅰ―保育実践教科書を分析する―」『東邦学誌』第 44 巻第 2 号, 91-110

古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬(2016)「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅱ―授業実践を通して―」『東邦学誌』第 45 巻第 2 号, 37-56

古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬(2017)「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅲ―造形表現の授業の分析を通して―」『東邦学誌』第 46 巻第 1 号, 57-80

山野てるひ・岡林典子・ガハプカ奈美(2010)「音楽と造形の総合的な表現教育の展開－保育内容指導法（表現）の授業における『音環境を描く』試みから－」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 6 号, 47-59

山野てるひ・岡林典子・鷹木朗編著(2013)『感性をひらいて保育力アップ！「表現」エクササイズ＆なるほど基礎知識』明治図書

山野てるひ・岡林典子・水戸部修治編著(2018)『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア－子供の感性を豊かに育むために－』一藝社

和田 幸子,・田中 慈子(2021)「コロナ禍におけるクラッピング活動の教材性 ：リズムと言葉に着目した総合表現の授業実践を通して」関西楽理研究会 編 『関西楽理研究』(38) , 39-63

付記

本稿は岡林が全体構成を行った。1 章と 2 章を岡林と矢野が、その他を岡林が執筆した。本研究は、JSPS（課題番号 17K04889 代表者：岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」/ 課題番号 19K02821 代表者：矢野真「幼小連携のための保育・教育実践における木育教材開発」）の助成を受けている。